

しくない生き方をせよ。心はあくまで謙虚であれ。人に対しても謙譲であれ。しかし心の底には正しい人間としての誇りを持て。自分の為を思つてくれる人には、たとえ自分の生命をかけても、その人の不利になる事は、言つても「ならぬ」これは祖母の持論であり何時も聞かされていた言葉である。又先輩の姉からは、生徒に教えた事は自分で絶対に守れと。

二人の戒めの言葉はその後も私の心中で生き通している。赴任した藤川村は本当に気風も良く、子供達は純真で素直な子が殆どで、父兄は教師をよく信頼し全面的に協力してくれた。そして当時青年学校があり、男子も女子も二十五才迄その後は青年団に入ることになつてゐるが、本当に感謝したのは、数え年十九才で教壇に立ち、自分より年上の人も多く、恥ずかしく顔も上げられなく授業する新米の私に対し、とても眞面目に接してくれ、その中に全員が親しく友達の様に何でも話合えたのが嬉しく有難かつた。それから間もなく、日支事変、太平洋戦争となり、多くの青年が召集や現役で、日の丸の旗に寄せ書きや千人針の腹巻きなど、皆の祈りを込めたものを身につけて出征して行つた。出征には必ず役場と学校に挨拶に寄り、挙手の礼をし、中には「桜が咲いたら靖国神社に逢いに来て」と言つた青年もいたが、多数の人達が帰つて来なかつた。

懐かしく軍歌の力セントかけたけど  
空しさだけが胸に広がる

二年前の或る日。下中川出身で満州開拓団の旭村出身の神田昌一さんには嫁がれたスイさんに、何十年ぶりかで或る店でお逢いした。スイ

さんは、私が藤川小学校に勤めていた時の青年の学級で教師と先生というより、全部仲好の友達の中でも私と同じ大正「年生まれの特に活発な人で、満州花嫁にうつてつけだよと喜んで送り出した人である。二人の子を毒死させたとの話に、開拓団の悲惨さは、テレビや新聞で知つていたが、毎日仏壇の二人の子にお詫びしているとの事に私の方が涙がこぼれた。お店だったので長居も出来ず別れたが、その中お線香をたてにともおもつて、膝と悪くして、なかなか思うように治らなかつたが、八月に入ると気になつたので電話で何時頃行つたらと聞くと、何時でもよいとの返事なので、明日の十時にと約束して電話を切つた。その明日十時に着く様にタクシーを頼みお訪ねした。挨拶をするとすぐに仏壇に進み持参した菓子箱を上げ、線香をたいて心から押させていただいた。二年間でスイさんもすっかり元気をなくしていたし、時間も限られているので、すぐに当人のわかつている要点を聞き又書く事にしたら、なかなかその事についての答えが出て来ない。その中部厚い本を持つてきて、自分の書いたのがあるから、これを見てくれとの話で、それは二、三十年前に引揚援護局から引揚者全部に書いて出す様にと原稿用紙十枚位送られて來たので、書いて出したのを全部纏めて一冊として送られて來たものらしい。

先ずスイさんの書いた処を出し、色々聞いたが、本の通りと言うので、わからない部分を聞くのに時間がかかつた。お互いに老の悲しさ仕方がない。文章は美しい。入植先は満州國龍江省（黒龍江省ではないと聞いたが本の通りとの事）納河県下学田。昭和十四年二月十一日紀元節に入植していた昌一さんの許へ満州花嫁として迎えられた。先遣隊は、県南、県北、会津、浜、磐城、安達であり県北は三部落に分かれ、大きな開拓団だった。建設の後は、個人宅地二町歩、耕地十三